



女子大生家庭教師の 性愛レクチャー

伊吹泰郎

挿絵／くろふーど

立ち読み版



目次

Contents

プロローグ	4
第一章	異性に免疫を付けましょう.....	21
第二章	本物のセックスしちやいましょう.....	61
第三章	告白を成功させましょう.....	131
第四章	もっと頑張りましょう.....	183
第五章	大変良くなりました.....	237
エピローグ	273



登場人物 Characters

青山 宗司

(あおやま そうじ)

有名大学を目指す高校二年生の少年。佳菜恵に思いをよせるも内気な性格で告白できないでいる。

戸田 佳菜恵

(とだ かなえ)

名門大学に通う女子大生。真面目ながらも天然気味のおっとりした性格。宗司の家庭教師をしている。

戸田 祈里

(とだいのり)

佳菜恵の妹。姉と同じ大学に通う女子大生。気さくで明るい性格。宗司が通う喫茶店でアルバイトしている。

おどろおどろしいBGMが座席横のスピーカーから流れてくるのを聞きながら、宗司達は薄暗い建物の奥へ運ばれていった。

時折、甲高い悲鳴と共に、順路の脇や頭上からゾンビなどが飛び出してくると、怖くなくても驚きで身体が竦んでしまう。とはいえ、ジェットコースターの後だと、いい息抜きではあった。

やがて、中ほどまで来たと思しきところで、急に祈里が「宗司君」と囁いてきた。

「はい？」

「実はお姉ちゃん、今日中に宗司君へ言わなきゃって決めてたことがあるのよ。でも、なかなか言い出せなくて困ってるみたい」

「え……？」

少年の心臓が跳ねる。それが良くない内容なのは、内緒話めいた口ぶりで分かった。さらに祈里は三センチほど間合いを詰めて囁いてくる。

「あたしが先に教えてあげようか？ 心の準備はしとく方がいいでしょ？」

宗司はかなり迷った。

嫌なことなら、確かに覚悟を決めておく方が楽だ。しかし、本当は佳菜恵から聞かなければならない事柄らしく。

結局、熟考の末に答える。

「いえ、いいです。それがどんな話でも、僕はちゃんとした形で聞くべきです」
「……そっか」

薄闇の中、祈里が優しく微笑んだ。

「宗司君ならそう言うと思った。ほんと、不器用よねえ」

「かもしれない……」

自分でも分かっている。だが、祈里は言ってくれた。

「ふふっ、あたしは魅力的だと思うわよ、そういう真っ直ぐさ。お店でも良い子だな
って思ってたもの」

「え……」

普段と違う温かい眼差しに、ドキリとしてしまった。

「あたしの個人的な想像だけど、お姉ちゃんが遊びに誘われて渋ったの、告白みたいな勢いで迫られて、君に『異性』を感じたからじゃないかな。今まで密室で気軽に接してきた反動が、一気に来ちゃったのよ」

「僕といるのが怖くなったってことですか？」

今週の勉強中に距離を感じたのも、それが原因だろうか。だとしたら最悪だ。

しかし、祈里は首を横へ振った。

「お姉ちゃんが怖いのは、流されて『先生』から『女子』へ変わっちゃいそうな自分だと思う——って、これはあたしの推測だけだね。君が落ち込む必要はないんじゃないかしら。鈍感すぎるお姉ちゃんには、もっと強気に出てもいいぐらいよ」

「そ、そう……でしようか？」

どうもピンとこない。

「あたしは宗司君を応援したいな。もし良ければ、この先、恋愛のレクチャーを本格的にやりたいんだけど、どう？ 受けてみない？」

「レクチャーって、服装のアドバイスみたいなの？」

「そ。後は……」

祈里が何か言いかけた時、ガタンと軽い衝撃があつた。

「わ、とっ!!」

宗司は祈里の方へ倒れそうになり、慌てて身体を後ろへ反らす。

何事かと見回せば、ゴンドラは完全に停止していた。次いで、スピーカーからアナウンスが聞こえてくる。

『お客様にご連絡します。ゴンドラは間もなく動き出しますので、そのままお待ちく

ださい』

機械のトラブルかもしれないが、大事ではないらしい。

「こういうことってあるんですね……」

そう言つて祈里を見ると、彼女の口元にはいつもの小悪魔めいた笑みが戻っていた。逃げられない獲物で遊ぼうとする牝猫にもどこか似ていた。

「ちようどいいわね。ここで恋愛レクチャー、始めちゃおうかしら」

「い、祈里さん……?」

何やら嫌な予感が湧いてくる。

宗司は尻の位置をずらして、距離を取ろうと試みた。とはいえ、狭いゴンドラ内では、数十センチ離れるのがやっとだ。

さらに祈里の方からも、ジリジリと間合いを詰めてくる。

「ステップその一。異性に免疫を付けましょう」

そう言つて右手を差し伸べると、彼女は座席の端まで行き着いてしまった宗司の頬を、指先で軽く一撫でした。

「は……う」

触れるか触れないかのタッチでありながら、少年は若々しい肌の張りを、否応なし

に感じてしまう。

その瞬間から、気持ちと関係なく鼓動が速まりだした。

「何するんですか……っ。ま、ま、待つてください……！」

「駄あ目、待たない。数学も女の子の扱いも、実践に勝る学習はなしよ？」

きつと祈里は恋愛のレクチャーにかこつけて、いつもの悪乗りをしているだけに違いない。だが、これは刺激が強すぎる。

宗司は祈里の肩を掴んで引き離そうとした。と、その感触にもたじろいでしまう。

挑発的な態度と裏腹に、祈里の身体はひどく華奢で軽いのだ。下手に扱ったら、ガラス細工みたいに碎けそう。

しかも祈里はおおげさに身を竦ませて、

「やんっ」

宗司が今まで聞いたことのないかすれ声を漏らす。

慌てて手を離すと、彼女はニヤリと笑い、

「ほら。免疫がないから、女子にどう触っていいかも分からない」

「からかわないでくださいってば！」

これ以上、弄ばれたらたまらない。思い切って、もう一度祈里に触れる。

しかし、またもや「あんっ」

女性の繊細な手触りと色っぽい声には、股間までムズムズさせられた。

浮気者と言うなかれ。宗司だって年頃の少年なのだ。自慰の経験ぐらいいあるし、若い肉棒は隙さえ見せれば、学校だろうと図書館だろうと、持ち主の都合と関係なしに膨らみだす。

遊園地でも例外ではなく、竿はすでに太くなりかけ、ズボンの真ん中を山にしていた。周囲が暗くなければ、ぼつちり祈里に見られていただろう。

感度も比例して高くなり、表面でも芯でも、何かが渦巻くようだ。

宗司は中途半端に手を上げたまま、身動きできなくなってしまうた。

その汗ばみだした顔を、祈里は正面から覗き込んでくる。

「どう？ 恋愛とか抜きで見ても、あたしってそんなに悪くない顔じゃない？」

「あ……それは……祈里さん、すごく素敵だと……思う、けど……」

答えながら、宗司は顔から火が出そうだ。

（何を言ってるんだ、僕は……！）

しかし、祈里が可愛いのは事実。悪ふざけには困らされるけど、性格だって親しみやすく、『そんなに悪くない』なんて表現、控えめすぎる。

口ごもった少年に、祈里はニッコリ微笑んだ。

「良かった。初めてで興味なしの相手にイカされちゃったら、トラウマものだもんね」
「え、イ、イカ……って？」

「いい？ あたしは恋愛の先生だから、ここからは指導の一つよ？」

意味不明のセリフに続き、右手がスルリと下へスライド、宗司のズボンの真ん中にかぶさった。繰り返しになるが、ペニスは勃起^たかけだったのだ。軽く触られただけで、ムクムクムクッ！ 本格的に膨らみだしてしまう。

むしろ、弱い感触だからこそ、意識が手繰り寄せられ、神経もこそばゆさで満たされた。

「あ、ううっ!!」

なんとか歯を食いしぼるのが間に合い、かつこ悪い声は漏らさずに済んだ。だが、勃起は鎮められない。ズボンの圧迫で肉幹が振れそうになり、つい腰を揺らしてしまつた。すると下着と裏筋が擦れる。もはやこそばゆいなんて生易しいものではなかつた。身の強張る痛痒だ。

さらに祈里も、易々とズボンのホックを外す。

「ま、待って……!! 祈里さ——」

「怒鳴ったら、周りに気付かれちゃうわよ？」

「は、うっ……!!」

声を飲み込むしかなかった。

前のゴンドラにも後ろのゴンドラにも、見知らぬ客が乗っているのだ。その人達に、今の状況を知られてしまったら――。

額や背筋に脂汗が滲んでくる。そのくせ、股間はますます敏感になって、神経が表面まで浮き出てきたようだ。

しかし、信じられない。こんな場所での行為は、祈里にだってリスクが大きいはずだ。

(なのに……どうして!!)

ジイイッ。

「い……!!」

戸惑ううちに、ファスナーも降ろされた。皮肉にも、布地がどいたおかげで、股間はぐんと軽くなる。

そこでまたも白魚のような指を走らせる祈里。上に一回、下に一回。肉幹の付け根から裏筋までを、軽やかに往復だ。

「やめてっ……くだ……あっ……!!」

布地越しとはいえ、女の人に初めて急所を弄られてしまった。その痺れは性感をつま弾かれるように刺激的。

宗司の全身の肌が粟立ち、ペニスもここぞとばかりに大きくなった。

彼が今日穿いていたのは、伸縮性のあるボクサーパンツだ。肉棒は巢穴から這い出す爬虫類さながら、腰周りから切っ先を外へ押し上げようとする。だが下着に縫い込まれたゴムも、肥大化した亀頭をキュッと圧迫してきた。

「っあっ!!」

痛みが薄れた代わりに、切なさは倍増。あまり長く押さえられていたら、暴発までいきかねない。

こんな、人が大勢いる場所で――。

宗司はみぞおちが突っ張った。心臓も胸から飛び出しそうなほど脈打ちだしている。そんなにつちもさつちもいかなかった彼を見て、祈里がサディスティックな含み笑いを漏らした。

「まだまだ……これからなんだから……」

彼女はボクサーパンツの前面を持ち上げ、脚の付け根までずらす。今度こそ、股間

は完全に軽くなった。だが、何も触れていないのも落ち着かない。ピンと張った亀頭には、空気の感触までが悩ましい。

「ふうん……宗司君って、おとなしいのにおちんちんは遅しいんだ……っていうか、これって反則級の大ききさよね」

祈里の言う通りだった。

黒々とした陰毛は、一本一本が針金さながらに縮れているし、最大限まで勃起した肉竿は、太く節くれだちながら、表面に血管を浮かせている。エラはさらに幅広く、付け根との間に段差ができていて。亀頭も肥大化しきって、太く、丸く、握り拳とも似ている。

なのに、そのグロテスクな男根へ、祈里は迷わず触れてきた。右掌を竿へあてがって軽く起こし、五本の指はカリの真下に絡ませる。手にはまだ冷たさが残っており、少年は身震いしてしまった。そこを狙って、裏筋までがそつと圧される。

「ひ、うっ!!」

稲妻と似た鋭い痺れが脳天まで突き抜けて、もはや呻きを止められない。宗司は口を両手で押さえ、一緒に目も閉じてしまった。

「宗司君ってば、女の子みたい……」

祈里は言いながら、右手をゆつくり上下に動かした。

ズツ、ズツ、ズツ――。

手が下りれば、竿の表面がピンと張りつめ、エラと裏筋も伸ばされる。

逆に上がれば、エラの窪みがノックされる。

どちらの刺激も性感帯を直撃だ。

「ほんとにおつきい。これじゃお姉ちゃんも最初は大変かもね……」

祈里も興奮しかけているのか、声に艶っぽさが混じる。

掌へも熱が浮いてきて、その分、表皮のプニツとした柔らかさが、混じりっ気なしに牡肉をくすぐった。

オナニーとは全く違う。まさに愛でられるという表現がふさわしい気持ち良さだ。場所が遊園地でなければ、佳菜恵への想いがなければ、一瞬でうっとりさせられてしまったかもしれない。

手の動きに連動して鈴口も開閉しているのは、見なくても感触で分かった。さらに我慢汁がねっとり裏筋を伝い出しているのも。

「やめ……祈……さっ……」

「や、あ、だ。それにこの程度で慌ててちゃ、お姉ちゃんをリードできないわよ？」

そんな会話を挟んで、祈里は左手まで使い始める。こちらは亀頭にかぶせて、丸みに粘液をまぶしてきた。

ニチャニチャ、クチャクチャ。

生温い潤滑油のために、掌の動きは滑らかだ。それでいて、疼きは神経に引っかかって、際限なく積み重なっていく。いくら塗り広げられようと、ヌメリが途切れることはない。転がされる鈴口から絶えず増産されている。

しかも、指の動きはバラバラで、目を閉ざした宗司には、次の瞬間どう揉まれるかさえ予期できなかつた。亀頭が凹むほど圧迫され、あるいは指の腹でツツツとくすぐられて。

指一本の刺激にさえついていけないのに、それが十倍だ。抵抗なんて不可能だった。「は、うっ……うううっ！ 祈里さ……うぐっ!？」

粘液は肉幹にまで垂れていき、手コキの速度もアップする。掌が続けざまに滑る感触は、勢い充分なのに焦らすようでもあって、少年の心を真逆の方へ分断していく。

「ああ……あたしの手、ヌルヌルになっちゃった……あ」

「んっ……言わな……っでくだ……あうううっ！」

口へ両手をやっている宗司は、耳を塞げない。淫靡な声と息遣いにも、鼓膜を撫で

られてしまう。

嗅覚も普段より鋭敏で、少年はさつきから我慢汁の湿った匂いを嗅がされていた。周りの人達にまで届いているのではないか、そう思うと怖くて堪らない。なのに、快感は残酷なまでにノンストップだ。

仕方なく首を横へ振って拒否の意思を示したが、却って相手はイタズラ心を煽られたらしい。

ギョッ。急にペニスを締め付けてきた。

「はぐろう!!」

圧迫は一瞬で緩むが、練り込まれた痺れは消えてくれない。すぐさま愛撫も再開されて、亀頭は許容量オーバーのまま、追加の疼きを練り込まれていく。もはや溶けださないのが不思議なくらいだ。

さらに竿の根元が内側から膨らんで。睾丸周りの皮膚も収縮し、明らかに精液を送り出す準備に入っていた。

「祈里さん……も、無理っ……これ以上は……出ちやう……から……!」

色っぽく質問され、彼は夢中で頷いた。今やめてもらえば、辛うじて果てずに済む。



ゴンドラが動き出す前に、興奮を鎮め、先走りを拭い、ズボンを穿き直せばいい。

しかし、その境界を越えてしまったら。

ズボンの上だろうと、座席だろうと、構わず精液を吐き散らしてしまう。生臭い匂いを身体にへばり付かせて周囲の注目を浴び、佳菜恵のところへも戻れない。

祈里だってそこまでするつもりはないはずだ。

少年はそう信じた。だが――。

手コキは逆に速度を上げたのだ。さらに左手も右手の上へ移り、根元から亀頭の先端まで行き来の範囲を広げだす。滑り易いのをいいことに、エラの段差も遠慮なしに踏み越えた。

「ふ、くっ……んううふううっ!!」

宗司は一瞬たりとも口から手を離せなくなってしまった。

祈里の声音もますます妖しい。

「いってえ……宗司君、精液、ビュクビュクって……出してえ」

彼女が上体を傾け、だんだんと巨根へ顔を寄せてくるのが、気配で分かった。

もう絶頂まで十秒と持たないのに。

「んっ！　ふうううっ！」

宗司は無駄と悟りつつ、また首を横へ振った。すると祈里は安心させるように息を弾ませる。

「大丈夫っ、外へは出ないようにするから……っ」

どういう意味かは、直後に示された。彼女は手を竿の根元へ落とし、代わりに亀頭へ口腔をかぶせたのだ。

「ひっううっ!!」

エラの窪みにかかった唇が、巾着のようにすぼまる。ヌルヌルの内頬も、亀頭側面へ貼り付いてくる。

「う……あ……あ!!」

裏筋の細かな溝は、ざらつく舌尖がクニツと一擦り。

「くあふうううっ!!」

その淫靡な包围網が、少年にとどめを刺した。

我慢の境界線は崩れ去り、濁流と化した精液が男性器の奥から押し寄せる。その勢いと量に無防備な尿道粘膜を逆撫でされる感触は、自慰の時とは比較にならない強烈さだ。

精液は鈴口も問答無用に突き抜けて、祈里の口内へ噴き上がった。

「いいんだよね!？」

ズルいやり方だったが、他に行為を続ける手立てがない。

そのまま非力な彼女を膝立ちの姿勢で後ろから押さえ、操り人形を動かすように、木へしがみつかせた。

さらに一度は落ちたスカートをまた摘み上げ、細い腰の裏にかぶせる。

「いや……乱暴しないで……っ」

佳菜恵は腰と美脚が傾いて、突き出された尻の丸みが張りつめている。双丘の盛り上がり具合は巨乳に負けるが、全体的な質感なら勝っていた。さながら極上のクツシヨンだ。そこへはち切れんばかりに白いショーツが密着している。

「脱がせる……からね……っ」

宗司はこの期に及んで、手が震えてしまった。どうにか布地の縁を掴んで、肌から引きはがしていくものの、速度はナメクジが這うようにゆっくりだ。

ズル——ズル——。

露になってきた尻の谷間は、暗がりでも分かるほど、繊細そうだし、汗で潤っていた。爪を立てれば簡単に傷ついてしまうだろう。

ショーツがさらにズルリと下りれば、谷間の一点で菊門がひっそりすぼまっている。

セピア色の薄皮が、たくさんの皺を作りながら、穴の向こうを完璧に隠してしまっていた。こちらも脆そうだ。とても排泄の際に拡がるとは思えない。

反対にヒップの下では、マシユマロめいた陰唇が、愛液まみれで開いたままだった。「ああ……っ」

佳菜恵に抗う素振りはなかった。それは少年と約束したからか、あるいは怯えか。他の理由によるものか。

とはいえ、これ以上脱がせるのは大変そうだ。特に地面とくつついた膝から先は、確実に布地が引つかかかってしまう。

なら——いつそのまま。

宗司は半歩下がりがり、外へ出していたペニスを右手で握った。

「うくっ!!」

肉竿は遅しく、公園の木々と張り合うように反り返っている。それに我慢汁でベタベタしていて、気を付けないと手が滑る。

感度も高まりきっており、掌の圧迫は一気に亀頭まで突き抜けた。角度を変えろや、鈍い疼きはますます強まる。

「っ……う……うっっ!」

手負いの猛獣じみた呻きを聞いて、佳菜恵が慄くように美尻を硬くした。しかし、宗司は重くなる疼きをねじ伏せつつ、彼女のクレヴァスに亀頭を当てる。

「んく……!!」

「ふぁうっ!」

今度は二人同時にはしたない喘ぎ。

指や舌で触れてさえ火傷しそうに思えた秘所だ。接触の瞬間から、亀頭は過剰な熱に見舞われる。

佳菜恵の方も弾かれたように腰を浮かせかけた。

「逃げないでっ……!!」

宗司が咄嗟に押さえつけければ、ここまで好き勝手されているのに、彼女は従順にヒップの位置を戻してくれる。

「ありがと、佳菜恵さん……っ」

少年は祈りに教わったやり方で、小陰唇に巨根の切っ先をめり込ませた。ゆっくりと往復させて、慎重に膣内への道を探り始める。

「あう……くっ……ういいっ……!!」

小陰唇と谷間の濡れ肉は、クンニの仕返しをするように、牡の弱い部分を擦り立て

てきた。それだけでもコンドーム付きだと味わえなかった心地よさ。

気が急ぐのを堪えながら、宗司はさらに膣口を探した。やがて、猛る肉棒の上端が、穴の縁へ引っかかる。

あつた——。

ついに佳菜恵と一つになれる。

彼は胸を高鳴らせ、膝を開き直した。下半身を安定させたら、「行くよ……！」短く言って前進だ。

ズブ……ズ、ズズ……グチュ……。

剛直が潜りだせば、小陰唇も纏わりついてきた。しかし、負けず嫌いとも思える反応も、せいぜい膣口が割られるまでだった。

「つ……あつ！」

特大サイズのペニスは、佳菜恵にとって、凶器も同然。

肉穴を倍近く広げられた彼女の声は苦しげに変わり、上半身のみならず、小陰唇までが虚勢をかなぐり捨てたように竦み上がってしまう。

直後、宗司は膜のような弾力に行く手を阻まれた。

これが佳菜恵さんの処女膜——。

やっぱり彼女は未経験で、乱暴な動きは厳禁で。

咄嗟に止まれと己に命じる宗司だったが、下半身の方は尚も進攻し続けようとする。相反する力に、太腿の筋肉が振れて、

「くあっ!!」

一応ブレーキは掛かったものの、すぐさま牡の本能が高まってくる。引き返すなんて考えられない。

「行……くよ!」

さつきと同じセリフを繰り返して腰を突き出せば、直後には——プツン。

苦もなく生娘の証が失われた。

「は、ぐっ!」

「あっ……あっ……あああ……っつ」

一瞬の出来事なのに、決定的だった。秘洞も丸ごと収縮し、脈打つ壁が亀頭へ押し寄せてくる。祈里のような甘い歓迎ではない。処女膜の仇を討とうとするような、あるいはこれ以上の狼藉を拒もうとするような、きつい締め付けだ。

「うあ、うううっ!!」

宗司はみっともなく嘶いなないてしまう。今日は一発も抜いていないから、精液もたつぷ

り熟成済みで、いきなり発射の秒読みに入りそう。

息んで尿道を狭めても、股間の疼きは薄れなかった。のみならず、背筋、肩、脳天までが毛羽立つように痺れてくる。

「う……………ふあ……………！」

宗司は脂汗を浮かべながら、崩れそうな佳菜恵の腰を押さえつけ、精液の気配が鎮まるのを待った。

「ふ……………う……………っ」

かかった時間は、きつと一分以上。それから再び子宮口を指しにかかる。

刺激を抑え、佳菜恵への負担も減らすため、進むのは一秒ごとにせいぜい一ミリ程度に——そんなイメージを頭へ描いた。

とはいえ、思考へはのたうつ肉壁の動きが問答無用で割り込んでくる。全ての壁が力を合わせて、龟头を遮り、エラを引き止め、竿もゾワゾワ巻き取って、そんな光景が目に見え、自制は早くも砕け散りそう。

それでもどうにか牛の歩みじみた速度をキープして、酸欠ストレスになりながら、危険な洞窟を制圧していった。

「う……………あ……………かな……………さつ……………うあぐ！」

「そ……じ……君っ……は、入ってく……つうあっ！」

やがて、鈴口が分厚い肉の壁にぶつかった。

やっと到着。子宮口。終点だ。

「か、佳菜恵さん……僕、一番奥まで入ったよ……」

憧れの女性に囁く。とはいえ、自分も彼女も楽になつたわけではない。

膣は窮屈なままだし、居並ぶ褻はがむしやらに襲ってくる。むしろ、中途半端な達成感のせい、尿道が緩みそう。

佳菜恵の方は、彼以上に余裕がなかった。

「あ……うっ！ く、う、う、う……いひ……いっ！」

濡れたうなじに髪が貼り付き、反り返った背筋もへし折れそうだ。

このままじゃまずい、なんとかしないと――。

宗司は茹った頭で、佳菜恵の痛みを軽くする方法を考えた。

とはいえ元から大した知識などないのだ。まして、少しでも姿勢を変えれば、怒張が膣肉を抉ってしまう状況。

ようやく思いついたのは、手の届く範囲をマッサージすることぐらいだった。

「佳菜恵さん……手、使ってみるねっ？」

「え……あつ……え……!!」

「僕に任せて……!!」

不安を隠して断言し、ウエストとヒップの境を揉み始める。美しい括れは、破瓜はかの苦悶で凝り固まっていた。本来はもつとしなやかなはずなのに。それを蘇らせた。

佳菜恵は一瞬、驚きで身をくねらせかけたものの、どうにか堪えた。さらになれば、声音にほんの少しだけ、安らいだ色も混じってくる。

「あ……あん……宗司君の……触り方……んくっ……優しいの……お」

とはいえ、宗司も稚拙だ。何かの拍子に腰をずらして、牝粘膜を抉ってしまうこともある。そんな時には佳菜恵の余裕も霧散し、ヴァギナは我慢が決壊するように収縮、際どい肉悦を宗司へ流し込んでくる。

「ひ、あああつ！」

「佳菜恵さん……ごめ……んっ！」

その都度、少年も血が沸騰しそうな衝撃を我慢した。

やがて、しくじりも減ってきて、宗司はヒップへ手を移す。こちらは揉むのではなく、撫でるように愛撫。

「あつ……ううくっ……なんだか……やり方が変になってきてる……う……」

佳菜恵が落ち着かなさげに訴えてきた。

確かに手つきは痴漢さながらにねちっこかった。湿った肌は掌にフィットして、あたかもねぶり返してくるようなのだ。気持ちいいから、愛撫も丹念になる。

だが、手つきの変化に気付いた辺り、佳菜恵も楽になつてきているのかも。そこで思い出すのは、またもや祈里のアドバイス。

——お姉ちゃんとする時も、照れずに褒めるのよ?——

そういえば、佳菜恵がどれだけ可愛いか、自分は全く言っていないかった。

「か……佳菜恵さんって……」

「え……っ?」

「身体中、全部が綺麗で……素敵だよ。んっ、お尻も……すごく触り心地が……いいっ」

「や……あつ!! な、何を……急に言い出すの……っ!!」

佳菜恵は泣きそうな声を上げ、上体を後ろへ向けかけた。

「はぐっ!!」

下半身へ捻りが加わり、怒張を搾られた宗司は舌を噛みそうになる。

セックスでのぼせていたとはいえ、我ながら馬鹿なことを言った。だが、失敗と決

めるのはまだ早い。全て本当のことなのだ。

「自信を持って……っ。佳菜恵さんは……最高に可愛いんだっ。アソコの中は熱くなつて……そっちは凄くエッチだ！」

言いながら、尻への執拗なマッサージも継続する。こなれてきた膨らみを左右へ開いたり、また寄せたり。上と下にずらしたり。そうすれば菊門も息づくように皺を伸ばさせる。

「佳菜恵さんのが気持ち良くて……もうっ、僕っ、おちんちんがおかしくなりそうだよっ！ 優しい佳菜恵さんも、真面目な佳菜恵さんもっ、公園でイッチャウエッチな佳菜恵さんもっ、全部、全部っ、大好きだっ！」

「いやっ！ は、恥ずかしいこと……言わないで……えっ……！」

佳菜恵が首を横へ振り始めた。一緒に尻も不規則にくねりだす。ずっぽり刺さったペニスはまだでシェイクされるよう。だが、宗司は黙らない。唾を飛ばして捲し立てる。

「か、佳菜恵さんのアソコっ、僕のをギュウギュウ締め付けてっ、ぐっ、振り回してる……よおっ！」

「いやああうっ！ お願いだから許してええ……っ！ うあううっ、くっ、手も……」

お、動かさないでえつ！ 意地悪言わないでえええつ！」

嘆きの声を長く引き延ばす佳菜恵。とても褒められた時の反応とは思えない。

とはいえ、粘膜同士が擦れているのに、彼女は止まらない。やはり、痛み以外のものも感じてきたのだ。

そこで宗司は僅かに後退。

「う……ううっ！」

歯を食いしばり、警戒もしていたつもりだが、矢の返しさながらにせり出すカリ首の裏へ、媚肉の群れが引つかかる疼きは絶大だ。危うく腰が抜けかける。

「うあああっ!!」

「ひああうっ!!」

佳菜恵も濡れ褌を外側へかき出す動きには、神経を直撃されていた。

「あ……ひっ、ひいお……っ……や、何……今の……おっ……!!」

悲鳴の後にうわごとめいた呟きを垂れ流す彼女。

やっぱり、思った通り。佳菜恵は芽生えかけた快樂に戸惑っている。

今すぐピストンに移るのは難しくても、もつと慣らしていくことならできそうだ。

宗司の心へジンワリ喜びが入り込んできた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なり、美満の方が多いです。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!